

スタッフルーム
Staff room

ながらへば またこのごろや しのばれむ

ただ
武田めぐみ

(三田メディアセンター)

ミニマル、ときめき、断捨離…皆さんは片付けが得意だろうか？ このフレーズで勘づいているかもしれないが、筆者は何を隠そう、片付け始めるとそこにあるものを読み始め夢中になり、知らぬうちに空が明るくなっている…典型的な片付け下手である。好きな和歌集や小説は何度読んでも心に沁みるし、新たな発見があって面白い。演奏会のパンフレットをめくると、若葉からぼろぼろと零れ落ちる朝露の如く澄んだピアノの音色が聴こえてくるようである。写真集を開けば海を背景に優しく微笑んでいる人がいて、購入時は「このお写真よりもっと素敵なお姿を私は知っている」などと思っていたにも関わらず、「びっくり！ なんて麗しいの！」と掌を返し、この瞬間を捉えた写真家の方に深く感謝し、ネットで関連本の購入ボタンをポチッと押ししてしまう始末。どうしようもない人間である。

こうして増えたものたち全てを一緒に引越し先へ持っていくことはなかなか大変で叶わず、今ここで片付けなければならないという時に、えいっと勢いで手放すこと数度。悲しいかな、これはどうしてもと思う少しの本しか持たなくなった。当たり前だが一度手放したら同じものはよほどのことがない限りもう手に入らないが、良いのか悪いのかここ数年は一応それでどうにかなってしまっている。手元に持たずとも、ふとした瞬間にその本にまつわる記憶とともに鮮明に思い出せるからかもしれない。

恥ずかしながら私は本を読まない子どもであった。本屋や図書館は場としては好きだったが、本を読む楽しさを知ったのは中学生になってからのように思う。必要に迫られて読み始めた小説、主人公がすっかり忘れていた大切なことを思い出した場面で、だんだんそのページが色付き始め、眼前にその光景が現れたように感じた。目の奥で光がちかちかして風が頬を撫でてゆく。これが本を読むことかと驚いた。創作作品で見られる登場人物の心情表現は、なるほど、必ずしも誇張ではないようである。

それからは本を手にとることに前向きになった。とはいえ同世代と比べれば読んだ数は少な

いだろうが、正に本は師であり友であった。古人の歌を知るたびに、寒さが身を貫く厳しい冬の日に降り落ち積る雪は真白く、その美しさにはっとさせられた。綺麗な星や月の写真とよくわからない難しい数式に憧れ、宇宙飛行士や科学者になれたら面白いだろうと考えたりもした。写本に初めて触れた時は、何世紀もの時間に想いを馳せてわくわくした。先行論文にことごとく打ちのめされ、途方に暮れたこともあった。趣味の舞台観劇に関連する本を読んでは、華やかな世界がさらに奥深く感じられ元気をもらっていた。

しかし、今年の始めに疫病が広まり世界がめまぐるしく変わっていった。日々深刻化する社会状況にいよいよ本を手取ることはなくなった。

しばらく、とにかくよく寝て食べてオンラインで会話を楽しみ、たまに散歩してよく寝て…と過ごしていると、ようやく本を読んでみようかという気になった。近くにあったものをばらばらとめくると、藤原清輔朝臣の歌が目にとまった。以前は特に気にとめなかった一首なのに、読み返すことをやめられなかった。口ずさめば、少し涙が出た。

そしてふと中学最初の春を思い出す。本を読む楽しさを知った日。待ち焦がれた桜の花がやっと咲いた頃だったか。慣れない校舎の廊下を歩く。行き止まりより少し手前のドアをそっと開ける。貸出返却カウンターを通り過ぎると見える棚の中段にその小説はある。面白かったよ、と友人が囁く。黄色のカバーは多くの生徒が読んだからだろう、所々汚れて破れているが手に馴染む。気は乗らないがお墨付きだ。授業の一環で図書室の本を借りなければならない。「最後まで読むかな…」そうして苦々しい気持ちで表紙を開いた先で、私の世界は広がったのだった。

これから本とどんな記憶をつくるのが出来るのだろうか。別れを予感しつつもどうしても手元に置きたくなった本の購入ボタンをポチッと押しながら考える。根拠はないが、面白いことが待っているはず、きっと。ああ、楽しみだなあ。